

Die (友情) Freundschaft

事務局：
〒010-1632 秋田市新屋大川町 12-3
秋田公立美術大学 野村研究室内
<http://www.jdg-akita.org>
(018)888-8110
nomura@akibi.ac.jp

青少年交流のさらなる推進を

副会長・事務局長 野村 松信

会員の皆様、すでに前号の巻頭言で添野会長からお知らせ済みのように、この夏には、総勢十数名で編成された「PASSAU青少年スポーツ交流団」が来秋されます。本協会として、心から歓迎したいと思います。会員の皆様におかれましては、様々な交流行事やホームステイ等でのご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

ご存知のように昨年(2015年)10月の姉妹都市PASSAU市訪問団には、会員有志の皆様・友人(22名)と一緒に私が勤務する秋田公立美術大学の学生14名が参加しました。また、先日、湯沢日独協会からは湯沢市とジークブルク市との交流の記録として、中学生13名がホームステイしながら、様々な交流や体験の様子を伝える冊子が届きました。

初めての海外旅行でドイツ・イタリアを訪問した学生達は、世界的に著名な美術館で教科書でしか知らなかった有名な絵画・彫刻を見学できた事や多くの有名な観光地等を訪問できた感動と共に、PASSAU市での歓迎会・晩餐会など独日協会の皆様との心温まる交流会、人と人とのつながりを結ぶことが出来た喜びを語っていました。また、実際に現地を訪問したことで、日本とは異なる日常の情景・町並みや文化の違いを敏感に肌で感じ取ったようです。湯沢市の中学生も同様な感想が多くありました。

私の初めての海外旅行は大学3年生の時、西ドイツ(当時)でした。西ベルリンのホームシティ先のご家族に大変に親切にしてもらい、

初めて異国の地での異文化との交流を通し、大きな感動を覚えました。さらに、島国日本を認識することもできた事を35年以上経った今も鮮明に覚えています。学生時代の感動が私の現在の日独協会の活動の原点となっています。

私の息子も中学生の頃、スポーツ交流団の一員としてPASSAU市を訪問し、PASSAU近郊の町のポッキングのご家庭にお世話になり多くの楽しい思い出ができ、その後はドイツのファンとなりました。現在、東京在住ですが、ドイツとの交流行事(Hallo Deutschland)などに、積極的に参加しているようです。

インターネットが普及した現代、若い人たちは、様々なツールを利用し、我々の学生時代とは比較にならない程に、気軽に日常的に世界中の人々との交流が可能です。また、世界中の見知らぬ地方都市の詳細な情報も入手可能です。しかし、やはり、実際に自分の五感で現地の雰囲気や体験し、現地の人々とのスポーツや音楽などの文化芸術交流を通して得た実体験こそが、本当に心に深く残るものです。このことは、少しの言葉の壁や文化の違い等があり、たとえコミュニケーションに多少の苦労があったとしても、今後の国際交流を進める上の大きな推進力になると考えます。

他の団体・組織にあっても、構成員の高齢化などにより活動が停滞するなど、後継者(人材)



の育成が課題のようです。本協会やパッサウ独日協会の将来を考える上でも、人材育成が最重要と考えます。その為には、青少年による交流をさらに推進し、国際交流に関心を持つ青少年を増やすことが、本協会の若者会員の増加・発展に寄与すると思います。

最後に再度、この夏の「パッサウ青少年スポーツ交流団」の来秋を心から歓迎し、参加した交流団の皆さん全員に本当に喜んでいただける“おもてなし”を協会としてやっていきたいと考えています。ご協力・ご支援をどうぞよろしく願いいたします。



1979年9月（ボン近郊のユースホステルにて）
世界青少年交流協会主催の交流行事に参加して

《会員よりご寄稿いただきました》

「もう一度旅に行きたい国 ドイツ」

会員 佐川 光男

私は若いときからあまり健康とはいえない人間でしたので、海外旅行など到底叶わない夢とっていました。それがふとしたことを機会に、ヨーロッパへ旅することができるようになったのです。旅の行先はパリとウィーンと決めており、3回目の旅はウィーン訪問でした。ウィーンのホテルに荷物を置いて気の向くまま、オーストリアとドイツの大都市を観光巡りするという計画でした。

1994年6月、ウィーンからパッサウに向かいました。ウィーン西駅8時発、ハンブルク行きのEC特急に乗りました。列車はドナウ川に沿って西方向、上流に向かって走ります。線路はリンツで右折、北上してドイツに入ります。

ドナウ鉄橋を渡ると、間もなくパッサウに到着します。その日は金曜日で、列車は正午ジャストに到着。当時のパッサウは金曜日の午後になると商店も役所も一斉にお休みで、昼食をとるレストランや買い物をするお店もありませんでした。しかし、歩き回っていたら一軒の中

華料理店が営業中でした。この店主は家族全員で広東からパッサウに移住し、15年も営業してドイツ国籍を取得したのだそうです。

私はどこかの都市を見物するときには、先ずその土地の一番高い場所に行くことにしています。高所から地域全体をぐるりと見回すとその土地の状況が感覚的に分かる気がするのです。以前、秋田に来訪されたエリカ・ゲルさんに、パッサウに来たら河対岸の山上にある公園のフェステオーバーハウス（元司教の居館）を見学しなさいと勧められたのを思い出して、その公園にタクシーで行ってみました。まさに絶景で、パッサウの地勢や街全体の雰囲気もよく分かります。ドナウ川・イン川・イルツ川の大河の三角州の上に築かれた、古来商業・交通の要衝として栄えていた都市です。ドナウ川の埠頭には黒海から遡上してくる多数の外洋船が出身国の国旗を掲げて停泊していました。

帰り道、駅まで散歩しながら、清潔で静かな古都の良さを味わいました。ヨーロッパのドイツ、オーストリア、フランスでは、いずれの国でも美しい景観を保つため、町中にでかかど大きな看板を設置することは禁じられていま

す。スーパーや病院等の広告板さえないので。

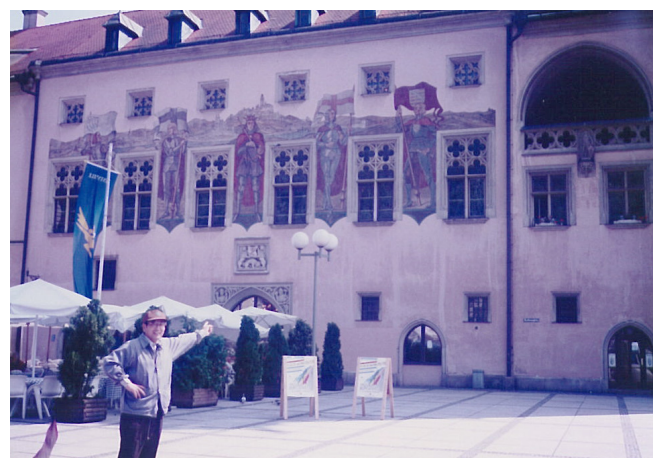
それから4年後、ウィーン～パリ12日間のバスツアーに参加しました。オーストリアのザルツブルクからバスでドイツに向かいます。ドイツアルプスの山地を通り抜けると、目の前には広大な平野が開けてきます。日本と違って水田地帯ではなく、草地の原野です。バスはアウグスブルクへ向かって走っているのですが、やがて右手（北方角）に広々としたキームゼー湖が見えてきます。琵琶湖くらいの広さでしょうか、その湖の真ん中に大きな島（竹生島の三倍くらいの広さ）、但し大きな山はなく平坦な丘陵地形の島があります。その島の船着場から真っ直ぐ正面に、ヴェルサイユ宮殿を模したヘレンキーム城が築かれています。戦時に備えたいかめしい石造りの門や塀はなく、舟遊び、魚釣りのための別荘かと思われる気楽な保養所のようなでした。この美しく気持ちの良い城に、1886年6月12日、バイエルン国王ルードヴィヒ2世が幽閉され、王位を剥奪されました。そして翌13日の夜間のこと、王は絶望のあまり室外に逃れ、41歳の若さで湖に入水自殺してしまっただけです。何とも痛ましく悲しい出来事でした。俗世間の政治や軍事にはあまり関心がなく、むしろ文化的芸術分野に関心が高かった王は、当時不遇で借金取りに追われ、各地を流浪していた大作曲家リヒャルト・ワーグナー（1813年、ライプツィヒに生まれ、1883年ヴェニスにて死す。5代目かにあたる子孫は現在でもバイロイト歌劇場の運営を取り仕切っている）を窮地から救い、さらに彼が自由に作品制作に専念できるように莫大な資金援助を与えました。ワーグナーは作曲ばかりではなく、自ら楽劇の台詞、台本、舞台衣装、演技振付のト書きまで、自筆で書いた創作の巨匠です。また、思想的にはニーチェやショーペンハウアー等と論説を競うという程、視野の広い人

物でした。そのようなこともあり、王はワーグナーの作品を高く評価したばかりではなく、ワーグナーの熱心な信者でもあったのです。

それにしても不審なのは、ルードヴィヒ2世国王を幽閉に追い込んだ王室参議官とかいう官僚や貴族の面々です。天真爛漫で真面目な芸術愛好家の国王を当時権威あるとされた精神科医師団が、王の行動をパラノイア（偏執病）といとも簡単に断定し、強制的に退位させ幽閉し、王には一般の国民に面会も対話もさせずに自死に追い込んだ事実。こういう参議官等の一統は、信義、誠実の義務に違反する犯罪者ではないのかと、美しきドイツ旅行を思い出す折り、私は自分勝手に当時へ思いを馳せてしまいます。



1994年6月
山頂に見えるオーバーハウス（パッサウ）



1994年6月
パッサウ市庁舎前にて

